

On the Causal Inference in Kant's Second
Analogy: Epigenesis of Pure Reason

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜田, 郷史, HAMADA, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1546

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



カント『純粋理性批判』第二類推における因果関係の推論について

— 純粋理性のエピジェネシス —

On the Causal Inference in Kant's Second Analogy

Epigenesis of Pure Reason

浜田郷史

HAMADA, Satoshi

エピジェネシスとは、生物はその原基から将来の形に適うよう自らを組織する、と主張する仮説である。本稿の目的は、『純粋理性批判』におけるカントの時間論、および因果性の議論を、「純粋理性のエピジェネシス」(B167)という文言に着目して検討することである。この目的のために、エピジェネシス概念の意義を外史的見地（ガリレオ、ハーヴェイ、エーベルハルト）およびカント自身のテキストから検討する。カントは超越論的哲学においてはエピジェネシスの学説が唯一可能だと断定している。本稿は、カントの時間論をエピジェネシスの観点から論じたあと、悟性の因果推論が決定的な意義を果たしているという観点から、第二類推を一貫して解釈する。このようにして、従来の研究と対照的に、カントの第二類推は、将来と目的合理性に規定されている悟性の本性を記述しており、機械論的な物理学の基礎づけに留まらないことを示す。

Epigenesis is the hypothesis that organisms organize themselves from their primordium to suit future forms. The aim of this paper is to examine Kant's discussion of time and causality in the Critique of Pure Reason, focusing on the phrase "epigenesis of pure reason (B167)." For this purpose, the significance of the concept of epigenesis will be examined from an external historical perspective (Galileo, Harvey, Eberhard) and from the perspective of Kant's own texts. Kant asserts that the doctrine of epigenesis is the only possible in transcendental philosophy. After discussing Kant's theory of time in terms of epigenesis, this paper consistently interprets the second analogy in terms of a causal inference by human understanding. Thus, in contrast to the previous studies, we show that Kant's second analogy describes the nature of human understanding that is defined by the future and means-end rationality, and not just a grounding of mechanics.

キーワード：カント、純粋理性批判、第二類推、意図、エピジェネシス

Keywords : Kant, Critique of Pure Reason, second analogy, intension, Epigenesis

はじめに

本稿の目的は『純粹理性批判』におけるカントの時間論、および因果性の議論を、「純粹理性のエピジェネシス」という文言に着目して検討することである。この目的のために、エピジェネシス概念の意義を外史的見地およびカント自身のテキストから検討する。ついで、カントの時間論をエピジェネシスの観点から論じる。そのうえで、カントの時間論を踏まえて第二類推を一貫して解釈する。

カントのテキストの内実は本論で述べるとし、以下ではカントの時間論・第二類推をめぐる外状況況を特に動物発生論において提起された「後成説」に着目して特徴づけておく。

『純粹理性批判』と後成説

『純粹理性批判』序論でカントは自然科学の急激な進展を自身の認識論の新しい方法に並行するものと見なし、詳しく論じている。このカントが提起する自然科学とは、ガリレイ、トリチェリ、ニュートンといった、主としてカントよりも一世紀以上昔の物理学の分野を意味するように見える。例えば、フッサールがカントの超越論哲学を理解する際にも、カントがガリレイの意味での科学を歴史的所与としつつ思考を始めたという点を強調しているように、こうした見方は一般的である¹⁾。

この進歩の内実については、数学の適用や実験の重視など様々に特徴づけることができるが、時間論に関して言えば、物体の運動変化を「過去」にのみ規定されたものと見なすという全く機械論的な世界観が重要である。カント自身の表現を引こう。

ガリレイが自分で選んだ重さの球でもつ

て坂道をころがり落ちさせた…時、あらゆる自然探求に一条の光がさしそめた。理性は、理性自身がみずからの企図に従って産み出す hervorbringen もののみを洞察する…。(BXII-XIII)

ガリレイの方法とカントの哲学の方法との類比は「産み出す」ことへの理解にある。このことについては後で論じる。さて、この斜面の実験でガリレイは「慣性」を実証している。球は坂を下るから加速し、坂を登るから減速する。従って坂がない平坦な地面ではいつまでも速度を変えずに運動し続ける。

細かいことになるが、ガリレイの実験で示されたのは現代の等速「直線」運動ではなく、地球表面上を等速で運動する「円」運動である。これは鉛直方向への重力の作用を含んでおり、地球でしか成立し得ないものである(池村2005)。それでも、ガリレイの「球」理解が傑出していることは言うまでもない。「球」の速度は、外力以外に何ら規定されない。坂を下る球は、重力によって一様に加速するのであり、地上を「憧れ」たり「欲求」して落下するのではない。

斜面の実験が正しいとすれば、物体の状態変化は、「現在」以前に、外力の作用によって規定されたもの、としか説明できないのである。このことは、伝統的な自然観に大幅な修正を求めるものだった。地球表面上の物体、例えば蛙がエラではなく肺を持つようになるという状態の変化についても、ガリレイと同じような明晰性を求めようとする場合、蛙が呼吸することを「意図した」などと呼ぶことはできない。両生類に、自らの将来をいわば意図する力は内在していない。もとより、神的・超越的な「予定」「摂理」を想定するこ

とは、自然科学においては不適切である。将来の形相を予定し、その目的に適ったものとして構造を変化させるというような理解は、ガリレイが実験の設計段階で拒絶していた自然観である。

しかし、目的論的因果性が自然科学から追放されたと見るのは誤りである。発生学の分野では従来の生命的自然観とこうした自然科学的方法の調停が早くから意識されていた。血液循環説で知られるハーヴェイはガリレイと同時代人で、彼から直接影響を受けたかは定かではないが、機械論の立場から、心臓とポンプを類比していた。しかしハーヴェイ自身は、生物の発生を論じた著作『動物の発生について』において、「技術において時々起こることは自然においてもまた時々起こる」(Harvey, 427)と考えており、自然のこうした目的-技術連関との類比をアリストテレスに淵源するものとしている。つまり、ガリレイが批判していたアリストテレスの先見性をも強調しているのである。

その『動物の発生について』でハーヴェイが立てた学説が後成説・エピジェネシスである。彼において後成説とは、全ての生物は一にして同じ未分化な「原基」から次第に複雑な機能に分化発展してゆくという考え方である。対立仮説である前成説では、生物の形相は初めから精子の中に小さな人間として埋め込まれていると考える。ハーヴェイは、遺伝される形相が父親側だけに制約されるわけではなく、母に似る場合もある、類似性には個体差があるなど、多くの難点を挙げてこうした学説を退けている。

ハーヴェイ研究の松永俊男は以下のように述べている。ハーヴェイは、「エピジェネシスの初期の段階からある種の「精神と予見と英

知」(mens, providentia, & intellectus)が働き、子供を「親に類似したもの」(similitudinem generantium)に形成すると述べ、それも父親に似る場合、母親に似る場合、あるいは祖先に似る場合があり、同時に生まれる卵の間でも違いがあるのはなぜかと問う」。胚の時点では役立たない器官を形成し、まるで将来を予定したかのようにリズムカルに振る舞う生物の遺伝という特性がハーヴェイの興味を引いたのである。しかもハーヴェイは、この原基をまったく白紙状態に類したものは考えなかった。個体は、原基から将来の形相に適うように自らを作り変えるように観察されたのである。こうして、生ける自然は、過去にのみ制約される自動機械、すなわちゼンマイ時計ではない。生物は、或る種の「精神と予見と英知」の働きを持つのである。むしろ自然は「技術」に類比的な、例えて言えば楽曲を将来に向けて再生する演奏者なのである。カントは、この後成説の体系に大いに刺激されたと見え、『判断力批判』でも以下のように述べている。

それ〔前成説〕に対して後成説の弁護者の場合では、彼はこの理論の証明のための経験根拠に関しては前者よりも卓越しているわけではない。だが理性は、証明する前から、後者の説明の方法を好んだであろう。…この説明の方法は、根源的に、目的の原因性に従ってのみ可能なものとして表象される事物に関して、自然を、単に繰り出されるものとしては考察せず、みずから生産するものとして考察する。そしてしかも、超自然的なものの介入をできるだけ少なくし、最初の生物以後のすべての結果を自然に任せるから

である。(KdU, V424)

見られるようにカントは後成説に好意的であるが、しかし、その評価は幾分遠慮がちである。理性にとって後成説が前成説よりも好ましいとされながら、その経験的妥当性の「証明」は留保されているのである。しかし、カントにとって後成説は単に生物学という一学問領域においての仮説、あるいはせいぜい『判断力批判』に限定される主張ではない。他ならぬ純粋理性そのものにとって、この問題は重要であるとカントは考えていた。カントは演繹論において、「カテゴリー」の「自然発生説」と「後成説」の可能性について触れている。そして、純粋理性にとって、

…第二の道のみが残される（これは純粋理性のエピジェネシスの体系である）。悟性の側からはカテゴリーは経験一般の可能性の根拠を含む。けれどもいかにしてカテゴリーが経験を可能にするのか…は、以下の、判断力の超越論的な使用についての章でさらに説かれるだろう。(B167、傍点筆者)

『判断力批判』でカントが慎重に述べるように、実証科学の分野において後成説は仮説の域を出ない学説だった。しかし、図式機能や原則論は、純粋理性のエピジェネシスに他ならないとカントは考えていた。

以上のように考えてくると、ガリレイらの機械論的自然科学がカントの認識論上の学説に並行しているという先の見方は、より広い視点から捉え返すことを余儀なくされるように思われる。すなわち、機械論的自然科学とはかなり異なった学説である後成説＝純粋理

性のエピジェネシスが、むしろガリレイ的な自然科学の基礎となっているということになるからである。これから述べるカントの時間論および第二類推も、以上のようなガリレイの実験科学の衝撃と、生命観、自然観、そして人間観の動揺に対応していると思われる。以下では、この純粋理性に付される後成説をエピジェネシスと訳出して、生物学上の一学説としての後成説と一線を画すこととする。

第二類推の妥当範囲の確認

前節では後成説の輪郭をやや詳しく論じるとともに、演繹論における「純粋理性のエピジェネシス」という用語を確認した。そこでは「判断力の超越論的な使用」について今後述べていくことが確認されている。しかし先行研究はエピジェネシスの概説に留まり、第二類推を考察していない (Lu-Adler 2018)。本稿では、演繹論で予示された「純粋理性のエピジェネシス」の体系を「判断力」の側面から超越論的な論証方式によって検証する作業が原則論であり第二類推であると捉える。そこで、「目的の原因性」という概念の不可欠の意義を第二類推論に認め、もってカントの因果性に関する議論の射程を確認するのが本稿の目的となる。結論から述べれば、この作業によって示される因果性の原則は、現在が過去からのみ規定される時間理解ではなく、将来からも規定される時間理解と不可分であり、事前に計画を立てて行動する目的合理的な人間理解を可能ならしめるものなのである。このため人間は感性によって制限されつつも却ってそれに束縛されることはないのである。

しかしもちろんこのような論の運びに対しては、次のような反論が考えられる。すなわち、後成説は当時の科学上の知見を背景にし

経験に基づいた学説である。他方、カントの超越論的論証はカント独自の論証である。領域も妥当性も相異なる二つの説の一方を他方によって比喩的に述べた一節を解釈するには慎重であるべきであろう。

そこでまず初めに、後成説を含む自然目的論に対する『純粹理性批判』でのカントの理解を見、それと演繹論で説かれるエピソードとの概念的な差異を明確にさせよう。カントは、「技術において起こることは自然においてもまた起こる」という類比によって、「精神と予見と英知」（ハーヴェイ）のような作用が自然の側に実在することをアプリアリに認めるのではない。次のように説かれる。

自然的理性は以下の二つのものを類比によって推論している。すなわち、ある自然の所産Naturprodukteと、人間の技術Kunstが自然に力を加え自然を強制し、自然の目的に従って働くのではなく、かえって我々人間の目的のうちに萎縮するよう強制するとき産み出す hervorbringenもの、との類比（たとえば家、船、時計との類似）から、ちょうど悟性や意志のような原因性すらもが自然的所産の根底にもあるだろうと推論するのである。…だが理性は自分の知っている原因性から、彼の全く知らない不明瞭な、証明し得ない説明根拠へと移行しようとするとき、そのことに自分で答えを出す「責任を持つ」ことはできない。
(A626/B654)

この箇所ではカントは当時の自然神学を念頭に置きながら、それが既知の「人間の目的」から「自然の目的」への誤った類推をなすもの

として、批判的に考察している。例えば、鹿が時間的に遠く実現の可能性の少ない目的を「予見」して角を用意していると主張すれば、そうした主張は擬人的であり妥当ではないのである。しかし先に見た『判断力批判』にあったように、これは必ずしもいかなる目的論的な自然理解を否定する態度とはみなし得ないだろう。すなわち、自然的理性の主張はあらかじめ「答え」（「精神と予見と英知」はある）として受け取ることとはできないのであるが、問いの形（例えば、何のために鹿の角は生えるのだろうか？）として受け取れることを、カントは批判していないように思われるのである。つまりカントは、現代の進化論者が否定するような目的論的な自然観を「証明」されることなく独断的に措定したのではなく、生ける自然が持つ機能や働きの発見に関わる方法を前成説の体系に期待していた、と言える。

それでは、この問いに答えを出すにはいかすべきか。ガリレイの引用のあとで、カントは次のように論じていた。

理性は…自分自身の原理を一方の手に持ち、自分がその原理に従って工夫した実験を他方の手に持って、自然に向かわねばならない。それはもちろん自然から教えられるためであるが、しかし教師の欲する通りを何でも言わされる生徒の資格においてではなく、自分が提出する質問に答えるよう証人を強要する、裁判官の資格においてである。(BXIII)

それゆえ、後成説の経験的妥当性如何もまた、理性自身によってではなく、理性がふさわしい資格において自然に質問し、「自然から教えられる」べきである。つまり、経験を通じて、

自然科学の進み行きによって実証的に答えられるしかないであろう。これは、先に見た『判断力批判』のカントの慎重な立場ともよく調和する。

以上で、生物学上の学説としての後成説についてのカントの理解が述べられたとしよう。しかし、演繹論で見たとおり、純粹理性に関する超越論的な認識論の観点のもとでは、エピジェネシスは経験的に検証されるべき可能な立場どころか、アプリアリに妥当であり、唯一の答えであると述べられている。

後で詳しく述べるが、カントはあくまで経験世界を系列の形式的条件としての「時間」のもとで機械論的に理解している。しかし、それを可能にする認識根拠としての悟性性に、一種の「精神と予見と英知」の要素、すなわち事前的因果推論の契機を求めるのである。機械論的な物質理解と伝統的な生命観・人間観の調停という課題は、『純粹理性批判』においては、時間形式と悟性という異なるものを「図式」によって包摂するという作業によって認識論的に解決される。因果性カテゴリーは、感性の形式とは全く異なっている認識源泉であり、これが感性と協働することではじめて認識を与えるものなのである。

認識のために、理性は「自分自身の原理を一方の手に持ち、自分がその原理に従って工夫した実験を他方の手に持って、自然に向かわねばならない」。——実験を配慮し計画するところの理性、つまり先に述べたガリレイ自身が、目的合理的に行為し機械的な認識を「産み出す」根拠なのである。このようにして、経験世界に生きる生物一般において仮説の域にとどまるエピジェネシスが、こと人間悟性に関しては唯一の妥当性を持つのである。

こうしたカントの戦略の成否については、

ここでは論じない。しかし少なくとも次のことは言えるであろう。すなわち、第二類推を単に機械論的な力学の基礎づけとして理解する従来の解釈は、まさにガリレイの実験の成果だけを見てガリレイ当人を見ないが如くであり、第二類推のコンテキストの非常に限定的な一面しか見ていない。むしろ重要なことは、因果性というものをこうした背景のもとでどのように理解すべきかである²⁾。

以下、行論は次のように進む。まず、カントに批判的な立場を取った同時代人であるエーベルハルトとカント自身の応酬と、第二類推を批判的に論じた鄭の先行研究を見る。鄭とエーベルハルトは因果性の基本的な理解において同様であり、エピジェネシス、すなわち事前的な因果推論の発想を取り入れることで困難は解決可能であることを論じる。

エーベルハルトの論難

カントの同時代人で「正統ヴォルフ派」（藤井2014）であるエーベルハルトは、カントの『純粹理性批判』に対して有名な反論を行った。この反論はカントを刺激し、カントは彼に対して再反論を行っている。この議論の応酬からわかるのは、①カントは根拠律問題を継承していること、②カントから見るとヴォルフィアンは根拠律問題をわかっていないこと、である。①については、増山2015が明らかにしているように、カントは第二類推でヴォルフの根拠律を考慮していることがテキスト上も指摘できる。しかし、②エーベルハルトは根拠律を矛盾律から証明しようとしているが、これに対するカント自身の再批判、およびそこから推量されるカントの立場との差異もまた重要である。カントは、『純粹理性の無用論』（以下『無用論』）でエーベルハルト

トの主張を全文引用した上で難点を挙げている。そこで、第二類推において因果性をどのように理解するかの手がかりを得るために、このエーベルハルトとの応酬を見ることにしたい（以下の引用は『無用論』による）。

エーベルハルトは、次のように論じた。根拠律を証明するには、背理法による、つまり、根拠律が成り立たないような例を考えてみて、それが成り立たないことを示せばよい。根拠を持たない風というものを考えてみよう。

例えばもし空気の一部が東に向かって動き、しかも東で空気がより温められて希薄になるということがないのに、東に吹くことができるとすれば、この風は西に対しても東に対してと同様に動くことができるだろう。…つまり、同じ空気が、二つの対立した方向に動くことができることになるだろう。東にも西にも向かうことができ、東に向かうことも向かわないこともでき、それゆえ同時に存在し存在しないことになるだろう。（『無用論』VIII197）

したがって、とエーベルハルトは結論する。西に向かうことも東に向かうこともできるような、無根拠な風は「矛盾」であり「不可能」(ebd.)である。とすれば、どの風も根拠を持っているのである。

この論証についてカントは、それが背理法を使っていること、命題と事象の混同、根拠律の妥当範囲の議論が抜けていることなどを述べている。しかしエーベルハルトのこうした様々の前提に不満を表明するカントの立場に向かう以前に、もっと根本的な奇妙さが存在するように思われる。すなわち、「西に対し

ても東に対してと同様に動くことができる」という可能性は、「矛盾」であるとは、とても思えないということである。例えば、かつてアリストテレスが「可能性」を論じた。アリストテレスの議論では、「可能性」とは例えば「歩くことが出来るものは歩かないことも可能」（『命題論』邦訳230頁、21b11-24）というものであった。そのことは矛盾ではない、と論じられていた。まことに常識的な理解と言える。エーベルハルトはこのような日常的とも言える「可能性」の概念を認めていない。エーベルハルトは、西にも東にも向かうことができることを端的に「矛盾」であると断定する。エーベルハルトの主張は常識的にはもはや理解不可能なものであると言わねばならない。

カントもまた、このエーベルハルトの可能性概念を攻撃している。カントは、可能性を「一片の木材から神を彫る彫刻家」の例に出して以下のように論じた。

一片の木材から神を彫る芸術家は、その代わりに一つの腰掛けを作ることができただろう。けれども、そこから、彼が同時に両方を作ることができるということは生じてこない。（『無用論』VIII198）

両者ともに様相ではなく能力としての可能性を議論していることに注意しよう。その上で、カントによれば、「可能性」は「その代わりに…できる」と論じられるべきであり、「同時に…できる」と解釈したところに飛躍がある。確かに百円でコーヒーもジュースも買うことができるが、それはコーヒーと同時にジュースを買う、計二本買うことができる、ということではない。エーベルハルトは、背理法の

限界（排中律の妥当性）に無頓着だっただけでなく、背理法の適用においてすらも誤っている。可能性はそもそも矛盾していないのだ。常識的な応答と言えよう。

増山は風の議論がバウムガルテンには見られないことに着目し、これはエーベルハルトのオリジナルな議論であるとみなしている。しかし、もう一步進んで考えると、このように不合理に見える議論の背景にあるのはヴォルフの完全性の議論であるのかもしれない。敢えて憶測含みの解釈を施せば以下になる。ヴォルフの主著『ドイツ語形而上学』によれば、現存在は「可能性の補完」（§14）である。したがって、現に存在していないあらゆる可能なものは、いわば未完である。「東に吹くことができる」のであるなら、それは実際に「東に吹く」のである³⁾。このように、充足根拠律においては、現存在することをいわば本質の完成態や実現態として考えることができる。こうした前提のもとでは、概念的な無矛盾性とは、むしろ存在論における本質的な可能性であり、矛盾とは、物の存立不可能性を意味するということになる。

このように考える場合、事象の原因ないし根拠は、事象の現存在の根拠であるし、またそうでなければならない。ここからして、カントの提案した修正は、エーベルハルトの議論に影響を与えないことがわかる。カントによって修正された、「東に吹くこともその代わりに西に吹くこともできる」風は、その本質たる自己を完全に実現する（realize）ことができない。「東に吹く代わりに西に吹くことができる風」の自己実現を「東に吹く代わりに現に西に吹く風」と見ることは、「西に吹く代わりに現に東に吹く風」としてその風の自己実現を見ることと、両立し得ないからであ

る。「一片の木材から神を彫ることのできる芸術家」は、まさに「一片の木材から神を彫る」ことで自己を実現するのであって、「腰掛けを作ること」によって自己を実現することはあり得ない。現実には唯一であり、もし仮にその対立する属性を同時に実現しようとするれば、「東に吹くと同時に西に吹く風」「現に一片の木材から神を彫りながら椅子を彫る芸術家」などというものが存在することになる。それは、十分に理解（realize）できない。それは正真正銘の「矛盾」であり、そして「不可能」である。

かく見ればエーベルハルトの議論はむしろカントの提案した充足根拠律の論証（後述）に近づいているのである。もちろん、矛盾律を介しての論証につきまとう形式面での困難は当然のこる。しかし、カントの論証とエーベルハルトとの差異に迫るには、カント自身が行ったような常識的な応答・論難よりも繊細な探求を必要とするのではないだろうか。

以上のようなエーベルハルト理解が正しいものであるならば、エーベルハルトの議論には因果性や根拠について、何ほどか聞くべき見解があるということになるかもしれない。一方で、それに対しての『無用論』でのカントの攻撃は主として形式面に向けられた主張である。こうして問題は、第二類推は、エーベルハルトの議論の実質をも継承し（根拠律を継承し）ているのかどうか、エーベルハルトの見解を、方法論や形式的不備を受け入れなくても理解しうることを狙った議論であるのかどうか、ということになる。

図式的継起と状態間継起のアポリア

第二類推における「純粹理性のエピジェネシス」は、以上のようなエーベルハルトやヴォ

ルフの根拠律の実質を継承する立場として構想されたというのが私の見立てである。エーベルハルトとカントの差異に関して、あとに続く議論のために以下で取りあげたいのは、「図式的継起」と「状態間継起」の問題を提起した鄭2011の解釈である。鄭はカントの継起概念には図式論と原則論で混乱があり、その一貫した解釈ができないという難点をカントに見出す。

カントは図式論で因果性を以上のように定式化した。

或るもの一般の原因及び因果性の図式とは、或る実在的なものが任意に定立されるとき、つねに他の或るものがそれに続いて継起する、その実在的なものである。従って因果性の図式とは、多様の継起が或る規則にしたがって行われるかぎり、この継起によって存立する。(A144/B183)

カントは因果性の図式を「任意なものの定立」と「常に続いて継起する」という関係性として提示し、そうした関係性において継起が本質的要素であると述べている。「常に」と特徴づけられるように、ここで因果性は確率論的なものではなく、根拠と帰結の必然的な関係として理解されている。これを鄭は「図式的継起」と名付ける。

しかし、鄭は原則論での継起についての議論の中に、上記の特徴とは異なる、「状態間継起」の概念を認め、両概念の媒介にカントは失敗しているとする。鄭は言う、「このことは直感的にも理解されるはずである。「水→氷」という変化があるとき、当然「水」という「水でない状態」は条件としては必要である。そ

してそれが「氷結」というその変化である限り、この順序もそれ以外に考えることはできない。しかしこの意味で先行する「水」という状態が定立されても、「その実在的なものが任意に定立されるとき、いつでも何か他のものがその後に継起する」などとは断じて言えないはずである。両者における「先行するもの」の間に明らかな差異が認められるのである。」

非の打ちどころのない議論であるように聞こえる。氷にとって水は先行する条件ではあるが、水にとって氷は必然的に後行しない。確かに氷は氷になりうるものであっても、いつでも氷がその後に継起するとは言えないであろう。

水がまずあって、その水は氷結することもできる。氷結しないこともできる。水は単に氷結のための可能性（条件）に過ぎない。鄭はそこから、水という状態の「任意」の定立を図式論で言われる必然的継起にはまだ至っていないと判断したのだろう。

この判断の根拠となる事柄の理解は、エーベルハルトの理解となんら異なることはない。「水」という対象について、「氷になること」「氷にならないこと」、これらはいずれも可能であると見なしているのである。しかし、両者がそこから引き出す結論はことなる。エーベルハルトは、このような可能性の理解が「矛盾」であるとみなして、そのまま根拠律を「証明」した。エーベルハルトからすれば、矛盾というのは存在論的な不可能性を言うのである。鄭は、このような水は存在すると考え、懐疑的結論に陥った。

解決のための前提：カントの時間論

水が氷になることは「氷結」として実現し、

水が氷になることは「融解」として実現する。「…それが「氷結」というその変化である限り、この順序もそれ以外に考えることはできない」。氷結の理解には、それ以外に考えることができないという、順序に関する思考の拘束性がある。氷結の概念が構成可能であるためには、現象の「図式的継起」で必要十分である。

すると、鄭が提起した問題とは、カントへの懐疑というよりも、エーベルハルトへの懐疑として捉えられるのではないか。カントにとって、エーベルハルトの議論は氷結という事象ではなく、氷結の概念的な理解に関するものでしかなく、事象そのものの実現に関する因果性が導かれず、したがって不徹底である。——こうして我々は、カントが図式論に加えて「原則論」を記述するに至った本来的理由を検討しなければならない。

私は因果性の理解が機械論的な因果性にとどまる限りは鄭の立論は尤もなものだと思う。だが水が氷になる際の因果性ということで我々が何を言わんとしているのかという点が先決問題ではないだろうか。

以上の難点は、因果性について事前と事後を区別し、「意図」という目的論的な観点を踏まえることで解決されると考える。目的という概念を背景に第二類推を讀解することの根拠と意義については、別稿でくわしく論じるので、ここでは、鄭の議論に即して論じる。

まず確認しておきたいことは、鄭にしても、水は氷結という変化に条件として「先行」するということと言える、ということである。「先行」とは、どういうことであろうか。カントにおいては、当然それには時間形式が前提されていると考えてよいだろう。

この時間についてのカントの議論は、第二

類推を理解するためにも重要であると考えられる。そのため、少々遠回りになるが、カントの時間論を改めて述べておこう。

時間はそれ自体として一つの系列（そしてあらゆる系列の形式的条件）であり、それゆえ時間においては与えられた現在に関して、条件としての前件（過ぎ去ったもの）は後件（将来のもの）とアプリアリに区別されねばならない。（A411/B438）

このようにカントは時間を「現在」概念に着目して規定している。カントの時間概念の核心にあるのは、過去と将来を現在によって区別することができるという認識機能であるといつてよい。この理由で、時間は、「1, 2, 3, 4, 5…」というような数の系列・集合とは異なる機能を含んでいるのである。しかも、カントはこの「形式的条件」を「あらゆる系列」に対しても認めている。こうして、「水が氷になる」という「継起」において、その「先行」の概念についても、「現在」という視点が必要であるということになる。これはカントの時間論の非常に基本的な論点である。

解決案：事後因果と事前因果の区別

時間についてのカントの論点を押さえた上で、現下の問題に取り組もう。時間には「現在」やそれに相対する「過去」や「将来」がある。だとすれば、ここで問うべきは「水が氷になる」と述べている時、その主観の「現在」「過去」「将来」はいつなのか、ということだろう。

二つの場合が考えられる。①現在、我々はみずみずしい水を前にしているとせよ。主観

は将来の結果に対して事前に「水が氷になる」と述べている。②現在、我々は凍てつく氷を前にしているとせよ。主観は過去の結果に対して事後に「水は氷になる」と述べている。「現在」において、一方は水を知覚し、他方は氷を知覚する。要するに、知覚の対象は時間形式において全く異なっている。容易に気づかれるように、この時間の顧慮が判断を構成する際に大きな影響を与える。

まず第二の場合を見てみよう。この事後的な因果推論においては、凍っている氷が実際に我々の眼前にあり、我々はそれを現実的に知覚しているのである。「図式的継起」とは、「その実在的なもの」(水)「が任意に定立されるとき、いつでも何か他のものがその後継起する」というものであった。この推論のためには、「現在」の知覚の他に、氷結に水が先行するという知をもっていれば十分である。

そして、「氷になること」と「氷にならないこと」とは、どちらも等しく可能、というわけにはゆかないであろう。水が「氷になること」は現実的であり、水が「氷にならないこと」は非現実的(文法的に言えば假定法現在)である。つまり水は、この場合は、現実に生じた出来事の、すなわち「生起」や「現存在」の、根拠なのである。

もちろん、この場合でも、我々はなおも「水は氷にならないこともできたよね」(假定法現在)と言いうるのである。しかし、この「可能性」の言明は、「水が氷になる」ことが単なる偶然である、つまり、必然的でないことを証明するものではありえない。假定法は、現実に起きたことについて我々が了解していることに依存しているのであり、まさにこの現実性についての婉曲的な確認にほかならない。もちろん、この現実しかありえない(必然的)

のかどうかについて、氷の現存は何も述べ立てていない。しかしいずれにしても、事後的に因果性について推論している場合には、鄭の疑念は起こらないと考えられる。以上のようにして、第二の場合において疑念は解決されたでしょう。

しかし、それよりも重要なのは、氷結という実際の出来事を人間はいかにして知覚するか、特に第一のように事前に知覚するのか、という問題である。結局のところ鄭の疑念もそこにあるのだろう。第一の場合においては、水は「現在」において紛うことなく、みずみずしく、水である。将来の、まだ見ることの出来ない氷をいかにして「現在」の立場から規定できようか。事前に知覚することは、明らかに文意の通らない表現である。知覚は現在に制限される。「将来」とは、不確定な部分であり、過去とは異なっているのだ。——全てこれらの主張には理があるように見える。このことについて、章を改めて検討しよう。

事前に因果性を推論することはいかにして可能か

この問題について、私はここで、目的因果性という論点を主張したい。氷結という出来事を既に起こった結果としてのみ考えるのではなく、事前に、これから生じる結果と考えても何も不都合はないだろうと考えるのである。私が実際に氷を作るために製氷室に水を入れるのは、まさにこの場合に当たる。その時、確かに私は実際に眼前にある氷を知覚しているのではない。けれどもそれは、氷を単に想像したり、願っているのとは異なる。ここでの論点は、我々は未だ無い限りでの氷を作るのではなく、まさに触れれば飛び上がるほど冷たい実際の氷を作っているということ

である。簡単にいえば、私は「水が氷になる」ことを<意図>している。そしてその意図の結果は「水が氷になる」ことである。

意図された「氷」と結果した「氷」は、概念的な内容としては全く変わらない。それは、対象としては「同一」である。原因と結果は、横に並んでいる二つの事物や項ではない。それらは、この意図的行為においては、対象についての主観の異なった「関係」なのである。目的としての氷についての私の関わりは、結果としての氷の現実的な知覚とは、しかし非常に異なる。私は氷を作らなくてもよい。冷蔵庫に入れなくてもよい。だから、因果性の図式において、実在的なものは「任意に定立される」のである。その一方で、結果は任意なものではあり得ない。水は必ず氷になる。冷蔵庫が故障して氷結しないなど、意図に反して結果しないということもありうるが、それは現象が過去である場合である。上述の事態はあくまで現在の立場から将来の結果を推論する場合であることに注意されたい。

目的（目的因）の実現を結果とみなすという点に、ヴォルフリアンの「可能性の補完」の継承がある。こうして鄭の疑念は解消される。時間論と因果カテゴリーの図式的包摂に基づいて、エーベルハルトとは異なった理路においてカントは根拠律を「証明」する。

エーベルハルトはなおも追いつがるだろう。「氷を作ることもできるし、作らないこともできる私」は、ビュリダンのロバであり、決して自己実現できない、不可能な私ではないか、と。この問題についての議論は「因果性」を越えて、様相や選択意志に接しており、そしてまたより広く根拠律そのものの問題となる。しかしそれについて本稿で詳しく追究することはできない。

結論

以上のように、「純粹理性のエピジェネシス」は、「将来」の水について悟性が目的因果的に「予知」し推論する可能性についても「証明」しうる。しかし、エーベルハルトとは異なる見地からも、なおこの「証明」が論証になっていないという議論は考えられる。すなわち、カントの時間論に基づいた区別は、我々が将来に向けて因果推論をしてしまうという心理的な特性や機能を記述しているだけであり、推論どおりに水が氷結することは、客観的経験に対する因果カテゴリーの「必然性」ではないだろう、ということである。

エピジェネシスについてカントは、「悟性の側からはカテゴリーは経験一般の可能性の根拠を含む」と述べていた。しかし、「悟性の側から」とは、かような記述心理学的な内容しか含まないのであろうか。もちろんそうではない。明らかにカントは経験そのものの「可能性の根拠」として、因果性を考えていたはずである。すなわち、経験世界の構造がまさに因果的な法則に基づいたものであることが第二類推の主要な論証目的なのである⁴⁾。

この点について本研究は未解決のまま。しかし、本稿ではエピジェネシスという考え方が第二類推の論証にとって重要な基礎をなしていることを、時間論と第二類推の関連を示しながら確認した。このことが本稿の目的であった。

引用参考文献

注記ない引用は原則として『純粹理性批判』による。カントの著作はアカデミー版の巻数・ページ数を付し、『純粹理性批判』については慣例に従って第一版をA、

第二版をBとして記した。

アリストテレス「命題論（言葉によるものごとの明示について）」『アリストテレス 世界古典全集 16』所収、水野有庸訳、筑摩書房、1966年。

Bayne, Steven M., 2004, *Kant on Causation*, State University of New York Press.

フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、1974年。

Guyer, Paul, 1987, *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press.

Harvey, William, 1651, *Exercitationes de generatione animalium* (『動物の発生について』), translated by Robert Willis, 1847, in: *The Works of William Harvey from the Latin with a life of the author by Robert Willis*, Sydenham Society, Johnson Reprint, 1965: 143-586.

Longuenesse, Béatrice, 2005, *Kant on the Human Standpoint*, Cambridge University Press.

Lu-Adler, Huaping, 2018, "Epigenesis of Pure Reason and the Source of Pure Cognitions", in: Pablo Muchnik & Oliver Thorndike ed., *Rethinking Kant Vol.5*, Cambridge Scholars Publishing, 35-70.

Wolff, Christian, 1752, *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt* (『ドイツ語形而上学』), in: *Christian Wolff Gesammelte Werke*, I. Abteilung: Deutsche Schriften, Band 2.1, Olms, 1983.

池村勉 (2005) 「ガリレオの斜面の実験と思考実験をシミュレートするアニメーションの製作—基礎物理学用Web-Based Learning Systemの部品の開発—」情報科学研究19号、阪南大学情報処理研究センター、1-18頁。

佐藤恒徳 (2014) 「完全性の哲学の解体—ヴォルフ学派とカント—」、東北大学、博士論文。鄭英昊 (2011) 「第二類推における継起の二義性」哲学論叢38号、京都大学、85-96頁。

手代木陽 (2018) 「ヴォルフにおける「可能性の補完」としての現実存在」、ライブニッツ研究第5号、

日本ライブニッツ協会、180-199頁。

藤井良彦 (2014) 「ヴォルフの存在論のために」立正大学哲学会紀要9号、105-118頁。

増山浩人 (2015) 『カントの世界論』北海道大学出版会。

松永俊男 (2019) 「ハーヴィの発生論と遺伝論」人間文化研究11号、桃山学院大学総合研究所、161-172頁。

1) フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と現象学』邦訳128頁以下。

2) Guyer 1987は因果性について、それが経験の対象を存在論的に構成するものでもなければ心理的に表象に前提されねばならないものでもないと言い、我々が認識を「正当化」する際に因果性が必然的な条件となっているという点こそが「経験の可能の条件」の実質をなすと主張する。因果性の理解が因果性に必要であるという主張については批判もあるが (cf. Bayne 2004, 92-97)、認識論を経験的な表象の発生や所有の説明と厳密に区別する点が優れている。

3) 「補完」概念には解釈者によって差異があるが、手代木 2018は汎通的規定により可能的世界で個体が既に存在できるが、現存在とはその個体が他の存在者と外的に関係を持つことであると論じている。佐藤 2014は、ヴォルフの充足根拠律に目的論的な問題を看取することには慎重であるべきとしている (27頁以下)。エーベルハルトが「風」という自然現象を例に出す場合にも、現存在の十分な理由としての根拠律が前面に出ている。

4) この点を強く打ち出した解釈として Longuenesse 2005を参照。Longuenesseはこの点でGuyerの議論には弱さが残ると考えている。

